序

2023年度はりんくう総合医療センターが地方独立行政法人化してから13年目、さらに大阪府立泉州救命救急センターとの統合後、11年目になる年でした。当センターは救命救急病床30床、感染症病床10床を含め、総病床数388床を有し、大阪府がん診療拠点病院、地域医療支援病院、災害拠点病院としての機能に加えて、泉州救命救急センターを併設し、極めて重要な医療機能を有する高度急性期病院です。母子医療では市立貝塚病院と泉州広域母子医療センターを共同運営し、泉州の産科医療・新生児医療（NICU）の中核としての役割を果たしています。当センターは全国的にも著名な国際診療科を有し、海外からの旅行者と大阪在住外国人の診療も行っており、2023年9月に外国人患者受入れ医療機関認証制度（JMIP）の4回目認定更新を行いました。

当センターは2018年4月にDPC対象病院の中でII群、DPC特定病院群（大学病院本院と同等の高度良質な医療を幅広い疾患に対して提供できる病院）に指定され、大阪府下でも極めて限られた高機能病院の仲間入りをし、2024年3月には日本医療機能評価機構から6回目の病院機能評価の認定（バージョン：3rdG：Ver.3.0、一般病院2）を受け、2024年4月にはNPO法人卒後研修評価機構（JCEP）による研修病院の再認定を受けています。病院機能も年々充実してきており、更に大変喜ばしいことに、米国を代表するニュース週刊誌Newsweekが毎年発表する**”World’s Best Hospitals 2024” JAPAN版**に当センターが昨年同様に選出され、日本で大学病院を中心に200施設、大阪府内では15施設（大学病院5施設を含む）の中の8位にランクインし、世界的に有名な病院の仲間入りができました。

当センターでは従来から泉州南部における病診・病病連携をより迅速にする診療情報連携システム「なすびんネット」を開設し、地域医療連携を積極的に進めてきました。泉佐野泉南医師会施設との病診・病病連携を活性化させるため、2017年に立ち上げたりんくうメディカルネットワークでは、地域の先生方と積極的な交流・情報交換を行っています。『泉州南部卒後臨床シミュレーションセンター（サザンウィズ）』では、臨床機能の習得及びチーム医療の充実を図る教育プログラムを実践し、初期研修医の人気も急上昇して倍率10倍にもなり、研修枠も増えました。若い研修医には国内・国際学会で発表し、英文論文も投稿できるように指導体制を整えており、国内外の学会発表や英文・和文論文の量及び質は他病院にも誇れるもので、Pub-Medで**Rinku General Medical Center**を検索すると、2023年は75編もの英文論文が発表され、その数はうなぎ登りに上昇しており、世界的にも認知された病院となっています。

南泉州地域では健診受診率が低く、癌や循環器疾患による死亡率が高いことが知られていますが、予防医学を推進し、研究マインドをもってりんくう及び南泉州地域の特色を活かした事業を多彩に進めるため、「りんくうウェルネスケア研究センター（RICWA）」を開設しました。RICWAでは地域の健診受診率を向上させ、生活習慣病や家族性高コレステロール血症等の早期発見・治療を目指して、地域医療者の教育・指導も行ってきましたが、2023年4月から臨床治験、倫理審査と共に予防医学を行う**先進医療開発センター**として再出発しました。

当センターでは一部診療科の医師不足がありましたが、最近は消化器内科医7名、呼吸器外科医2名体制となり、人材が充実してきており、今後も大学と連携して充実させる予定です。当センターは重症急性呼吸器症候群（SARS）、新型インフルエンザ、エボラ出血熱、中東呼吸器症候群（MERS）、エムポックス等の新興感染症に備え、本邦に4つしかない特定感染症指定医療機関であり、関西国際空港からの新興感染症の防波堤という重責を担っています。新型コロナウイルス感染者の診療も我が国で先導的な役割を担い、重症・中等症の患者や外国人患者、妊婦、透析患者を多数受け入れてきました。泉州地域の高度急性期医療を守る最後の砦として、今後も最高・最新レベルの医療を提供できる病院として職員一同頑張りますので、ご支援の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

理事長　山下　静也

序

りんくう総合医療センターは、泉州南部唯一の基幹病院であり、全国に4か所しかない特定感染症指定医療機関の一つです。また、泉州救命救急センターや泉州広域母子医療センターを併設し、災害拠点病院や大阪府がん診療拠点病院などの広域で提供すべき政策医療を担う高度急性期病院です。これらの実績が評価されて、厚生労働省から（令和6年4月1日時点）、DPC特定病院群（全国178病院、大阪府下20病院）に指定されています。また、手術や救急医療などの高度専門的急性期医療の提供体制を確保した病院（大阪府下27病院）に認められる「急性期充実体制加算」の算定も認可されており、まさに、「地域医療の最後の砦」として機能することを期待されています。

令和5年度には、公益財団法人日本医療機能評価機構が実施する病院機能評価（3rdG：Ver.3.0一般病院2）の訪問審査を更新受審し、令和6年3月8日付で認定を受けました。当センターが、質の高い医療を効率的に提供できていることを客観的に評価されたことになります。

また令和5年度に引き続き今年度も、アメリカを代表するニュース週刊誌“Newsweek”が毎年発表する世界のベスト病院2024「World's Best Hospitals 2024」日本版において、日本全国の大学病院を中心に200施設の一つとしてランクインしました。りんくう総合医療センターが開院以来スローガンにしてきた「軸足は地域に、視線は世界へ」を診療・研究・教育において実践してきた賜物であり、今後一層の精進を続けてまいる所存です。

さらに、関西国際空港の対岸という立地上、大阪府外国人患者受入れ拠点医療機関に指定され、外国人患者受入れ医療機関認証制度（JMIP）の施設認定を4度更新しており、国際診療にも力を入れています。

平成30年には、りんくうウェルネスケア研究センター（RICWA）を設立し、健診・人間ドック部門を充実させました。大阪府下でも特に低い泉州地域の健診受診率の増進を図り、病気の早期発見、早期治療に結びつけるとともに、当地域の未病対策にも取り組んでいます。令和5年度には、このRICWAを「先進医療開発センター」に発展的に改組し、先進医療の開発や臨床研究の拠点を目指します。

さて、令和2年からの3年間は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）入院患者を多数受け入れ、COVID-19患者とその他の一般入院患者の診療を如何に両立させるかに腐心した日々でした。この間に約1,500名の陽性患者の診療に携わりましたが、半数は圏域外の大阪市内や北摂地方の患者で、このコロナ禍にあっても当センターが如何に重要な役割を担ったかが分かります。

令和5年度は、コロナ禍という長いトンネルを抜けて、アフターコロナに向けての第一歩を踏み出す年となりました。泉州南部地域で唯一の高度急性期病院としての診療機能の充実を目指し、新たな医療技術の導入を行いました。一部の大学病院や特定機能病院でしか実施できない、難治性の血液がんに対して有効性が認められているCAR-T療法という細胞免疫療法の実施施設としての認可を取得しました。また、遅ればせながら令和5年12月には、内視鏡手術支援ロボット「ダヴィンチ（da Vinci）」を導入し、これまで他院へ紹介していた前立腺癌など、ダヴィンチ手術の有効性が確立された疾患の治療を当院で完結することが可能になりました。加えて、手術室の増室工事を行い、ここにはハイブリット手術装置を設置して、令和6年6月から大動脈弁疾患や胸腹部大動脈疾患に対して、高齢者などのハイリスク患者でも施行可能な経カテーテル的大動脈弁置換術や大動脈ステントグラフト内挿術が安全に施行可能な態勢が確保されます。このように当センターは一層、地域の方々に高度な先進医療を安全に提供できる医療機関を目指しています。

この度、令和5年度の年報を編纂しましたので、皆様にお届けさせて頂きます。

病院長　松岡　哲也